

受験 番号				
----------	--	--	--	--

平成28年度 獨協医科大学医学部
センター利用・一般入学第2次試験

小論文試験問題

(試験時間90分)

注意：

1. 開始の合図があるまでは、この冊子を開かないでください。
2. この冊子は4ページです。
他に下書用紙1枚と解答用紙1枚を配付します。
3. 問題の内容に関する質問は原則として受け付けません。
ただし、印刷が不鮮明な場合は、挙手のうえ監督員に申し出てください。
4. トイレに行きたいときは、黙って挙手をしてください。
5. 受験番号を所定欄すべてに記入してください。
6. 解答は必ず配付された解答用紙に記入してください。問題冊子、下書用紙への記入事項は採点の対象といたしません。
7. 試験終了後、問題冊子、下書用紙、解答用紙のすべてを回収します。

(平成28年2月8日実施)

問題 次の文章を読んで、以下の問に答えなさい。

〈知足者富〉——足るを知る者は富む。

紀元前五世紀、中国春秋時代に生きたとされる老子の思想のなかで、最も広く知られているのは『老子』第三十三章にあるこの一節です。何事においても足るを知って満足することのできる者が、本当の意味で豊かな人間なのだ——と、老子は説いている。

さらに、四十四章でも「知足」の大切さについて書いています。この四十四章を私なりに簡単に訳すと、ざっとこういう内容です。

地位や名声や財産と自分の体と、いったいどちらが大切だろうか。

得ることと失うことでは、どちらがより苦しみをもたらすだろうか。

名やお金に執着しすぎると、必ず心身を損なってしまう。無理をしてたくさん蓄えようとする、もっと大切なものを失ってしまう。

その点、足ることを知れば人によって辱められる心配がなくなり、ほどよいところでとどまれる者は危い目に遭わずにすむ。心穏やかに長らえることができるのだ。

老子が道を説いてから二千数百年が流れましたが、足るを知ることが今ほど難しく、また必要とされている時代もないでしょう。

モノと情報があふれる社会のなかで、私たちは絶えず欲望をかき立てられ、過剰に求めるよう促されています。また、子供のころから人と自分を比べて競うことを強いられてもいる。そんな社会で生きていけば、当然、心も体も疲弊します。気づいていないだけで、あなたの心身もう限界だと悲鳴をあげているかもしれない。

地球全体へと視野を広げれば、先進国と呼ばれる国に住む人間の際限なき欲望が、それ以外の国の人々や他の生き物たちを追いつめ、環境を破壊しています。その結果、我が子や孫も含めた人類の未来さえ危うくしている。そろそろ「快樂の踏み車」から降り、足るを知ること学ばなければ、本当に取り返しつかないことになりかねないのです。

(中略)

老子のいう「知足」とは、単に我慢しろ、欲望を抑えろということではありません。モノやお金、名声や地位や他者の評価といった自分の外側にあるものに振りまわされるな。もっと自足して生きよう——とすすめているのだと思います。

外なる価値も人間にとって欠かせないものですが、外に求め、人に求めるほど、それらに人生を左右され、自分が自分の主人ではなくなってしまう。だから、生きていくのに必要なだけあればいい、それ以上はいらないと、つつい求めすぎる頭に自分自身でストップをかける。外的価値を高めようとあくせくしたり、他者の評価を気にしたりすることに時間とエネルギーを費やすのを、思い切ってやめてみる。

もちろん完全にやめることなどできはしませんが、やめようと努め、人生をコントロールする力を自分の手に取り戻していくことが大事なのです。そうしているうちに、財産や地位とは無関係の、命そのものもつ輝きに目が向きはじめる。自分のなかにもその輝きがあることに気づき、今の、あるがままの自分も捨てたものじゃないと思えてくる。

これがあれば幸せになれると言われていたものや、自分に欠けていると思うものを手に入れても、また次なる何か欲しくなるだけです。それを続けている限り、幸せはいつもちょっと先にあり続ける。しかし、足るを知ったあなたは、もう鼻先にぶら下げられた人參を追う馬ではありません。今自分が手にしているもののなかにある喜びを、積極的に見いだしていけるようになるはずで

(中略)

足るを知ることが大事だと言っても、何もせず現状にとどまっていればいいというわけではない。老子は、〈知足者富〉のあとに〈強行者有志〉と続けています。強めて行^{つよ}う者は志あり——自分を励まし、志を持って努力を続けようと説いているのです。

向上心や努力というのも、幸せに生きるうえで欠かせない鍵の一つでしょう。そして、その鍵を生かすためには、やはり前段階として、知足という言葉^を胸に刻んでおく必要があるのだと思います。

足るを知らなければ、ないものねだりと向上心を取り違えて、自分の身の丈に合わない高望みをしかねません。自分の心が本当に求めているのではない何かに向かって、間違っ^た方向の努力を続けてしまう怖れもあるでしょう。

一方、今の自分がもっているものに満足し、自分を肯定できる人は、周囲の意見やら見栄やら流行といったものに惑わされたり、人と比較して自分ないものを求めたりすることが少なくなります。それゆえ、自分の性格や能力に応じた目標を定め、今の自分にできる努力を正しい方向に積み重ねていくことができるようになる。

まずは今あるがままの自分を受け入れ、そのうえで、よりよく生きようとする。知足と努力、この二つはセットになっていてこそ力を発揮するのです。

(中略)

足るを知るとは、言い換えるなら、あきらめるということでもあるでしょう。ここで言う「あきらめる」は、単に「断念する」ことではありません。

現在、「諦める」という言葉はマイナスのイメージで使われることが多いけれど、「明らかに見極める。事情をはっきりさせる」などの意味をもつ「明らむ」から派生した言葉です。「諦」という漢字にしても、もともとは仏教用語で、「真理を悟る」「道理を明らかにする」といった意味で使用されていたもの。物事の本質を見極めれば、つまらないことに固執しなくなります。おそらくそんなところから、「諦める」＝「思い切る」「断念する」という意味が生まれてきたのではないしょうか。

世界と自分自身をしっかりと見つめて、本当に大切に必要なもの^とそれほど必要ではないもの、自分に合っているものと合っていないもの、努力すればなんとかなることと努力してもどうにもならないことを見極めていく。そのうえで、断念すべきことは潔く思い切り、自分なりの目標や夢に向かっていく。そういう広い意味での「あきらめ力」を磨くことが、幸せな人生につながっていくのだと思います。

ところが今の日本では、欲望と狭義の「諦め」ばかりが幅をきかせている。自分の身の丈を越えて望み、もつともつとより多くを求める一方で、ちょっと失敗しただけで簡単に断念してしまう人がいかに多いことか。現状への不満を言うばかりで、「自分にはどうせ無理」と何もせずあきらめている人も少なくありません。

ユニセフ（国連児童基金）の調査によれば、世界の経済先進国二十五カ国に住む十五歳を対象に「三十歳になったとき、どんな仕事についていると思いますか」とたずねたところ、「非熟練労働へ

の従事」と答えた割合が最も高かったのは日本でした。それも二位のフランスを10%近く引き離し、50.3%と飛び抜けていたそうです。

確かに中学三年生にもなれば、幼いときのように無邪気な夢を語ってもらえません。社会の仕組みや自分の置かれた状況がある程度わかってきて、なんだか先が見えてしまったような気にもなるでしょう。しかし、わずか十五歳で「三十歳の自分は特定の技能や経験を必要としない仕事に就いているだろう」と冷めた予測をしてしまうのは、自らの手で可能性の芽を摘み取り、自分の将来を狭めてしまうことにはかならない。

また、若い人たちと話していると、「ほどほどでいい」「そこそこでいい」という言葉をよく耳にします。一見、足るを知っての発言のように思えますが、最初から「ほどほど」「そこそこ」でよしとしているのだとしたら、やはり自分の人生をあきらめてしまっているに等しいでしょう。若いうちは、ときに自分の能力以上のことに挑戦することが大切です、そうすることで人は成長していくのですから。

加賀乙彦著 不幸な国の幸福論（株式会社集英社）2009年12月21日発行
出題の都合により一部改変

問1. 本文を200字以内に要約しなさい。

問2. 本文の内容について、あなたの考えを600字以内で述べなさい。